

第14回 日能研

文学コンクール

奨励賞

【創作文】 クリームソーダな関係

親和中学校・三年
松本 悠花さん

作品に対する思い・感想

この度、奨励賞という賞を頂き、とても驚き、そして光栄に思っております。

今回私は、友達は性格や趣味で決めるものではないという事をテーマに書かせて頂きました。散文に対して苦手意識を持っていたのですが、今回の受賞を経て、自信を持つことができました。最後に、選考にあたって頂いた審査員の皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。

「クリームソーダな関係」

少し涼しくなってきた、心地よい風の吹くある日、いつものようにガラんとした雰囲気のこの喫茶店には誰一人として客がこない。経営に苦しみながらも何とか続いているから、いつ閉店してもおかしくない。そんな喫茶店に制服を着た若いN人組がやってきた。若い子なんていつぶりだろうか。私は嬉しさと緊張が混じった「いらつしやいませ」を言つてN人を席に案内する。一人の子はふわふわしていて優しそうな子でニコニコしながら椅子の方に座り、もう一人の子はいわゆる捻くれ者みたいで口をへの字にして少し不機嫌そうにソファに座る。見るからに外見から中身まで正反対なN人だ。席に座るやいなや、N人はメニュー表をじっくりと見てなにかボソボソと喋り出した。

「ねえ、何飲む？ 久しぶりだね、こうやってN人でゆっくりするのは」

「なんでもいいけど。好きな頼めば？ てか、別に一緒にする必要はない？」

「だけどさ、こういう時は一緒のものを飲んだ方がなんだか嬉しいじゃん！」

あ、そうだクリームソーダは？ 確か好きだったよね？」

「好きでも嫌いでもないけど、頼めば？」

「え、好きじゃなかったっけ？ クリームソーダって喫茶店によって味が違うじゃん？ ここに来るのは初めてだから初体験だよ！」

「もう、めんどくさいなあ、なんでもいいから好きな頼めばって」

会話を聞いていてもN人はまるで甘いクリームとしゅわしゅわのソーダのように正反対な性格をしている。こんな正反対な子達がN人でガラガラの喫茶店なんて興味深い。今日は他にお客さんもないし、ふわふわしている子をクリームちゃん、少し不機嫌な子をソーダちゃんと呼ぶ事にして、会話を覗く事にした。結局N人共クリームソーダを注文して、これでも仲良しという事が意外だった。クリームちゃんはスマホをいじりながらなんとなくソーダちゃんに話を振る。

「で、最近どうなの？ また暗そうだけど」

「いや、別に普通。」

こんな会話がずっと続いて、私がクリームソーダを席まで持つて行った時も、ソーダちゃんは、何か言いたそうだったが、ものすごく硬い表情をしていた。自分の本心の中々出せない性格なのか、それとも元々こんな子なのかよくわからない。私はソーダちゃんが何を考えているのか、頭をぐるぐるさせながら最低限の業務をこなした。しばらくしてポツリと

「私学校辞めたいんだけど」

と呟いたのが聞こえた。少し自分の手を置いてN人の方に視線を向けるとクリームちゃんは、んーっと口を結んでから

「別に私は否定はしないけど、なんで辞めたいの？」と聞いた。

「だって私、学校つまらないんだもん、なんで行かないといけなのかわからない。義務教育じゃあるまいし」

ソーダちゃんの言っていることも分からなくもない。クリームちゃんは

「まあ、確かに高校に行くのは自由だけど、どこがつまらないの？」

と再び聞くとソーダちゃんは険しい顔つきで

「学校って自分の可能性とかやりたい事を見つかる場所でしょ、なのに私何もやりたい事ないんだもん。おまけに成績だって上がらないし。もう高Nだよ？来年受験生だよ？」

必死なソーダちゃんの目には涙が浮かんでいた。私はソーダちゃんのことを少し心配になったけれど、そんなソーダちゃんを見てクリームちゃんはニコツと微笑み、

「へえーそんな心配してたんだ、安心したよ」

と言った。そんな返事はされると思っていなかったのかソーダちゃんは目を丸くしている。

「まさか将来のこと考えてるなんて思わなかったよ。そのまま誰の言うことも聞かずに一人違う道を歩んでいっちゃうのかと思っていたから、本当に良かった。学校はやりたい事も可能性も見つけられる場所で、もちろんそれも大切だけどそれ以上にこうやって学校帰りに制服で寄り道できるのも高校生ぐらいだよ？それ以下もそれ以上もできない貴重な時間なんだから楽しい事も発見する事だけでもいいんじゃない？それも高校生として大切だよ」

そうクリームちゃんがアドバイスするとソーダちゃんの険しかった顔は炭酸の泡が抜けていくように悩みもすーっと抜けていったように見えた。そして「ふーん」と一言だけ吐き捨てて、また残りのクリームソーダを飲み始めた。なんとも不器用な子なんだと思っただけで、店を出る時に「ごちそうさまでした」と言ったクリームちゃんの後に続いて出て行くソーダちゃんの顔には確かにぎこちない微笑みがあった。店を出ていったN人を見るとまるでクリームソーダを表しているように見えた。クリームの部分だけを食べても甘ったるくてソーダだけでも刺激が強すぎる。両方混ぜて飲んで初めてちょうど良い甘くてしゅわしゅわなクリームソーダになるように。